

創刊の辞 わが朋友の皆様へ

工学博士 佐藤源貞

Ph. D. Gentai Sato

このたびRFワールド誌創刊の辞の執筆依頼を受けましたことは、身に余る光栄であります。

“Radio Frequency”といえ、私が思い浮ぶのは、日本の艦隊が明治38年にロシアのバルチック艦隊を対馬海峡に迎え撃った日本海海戦です。大勝した要因の一つは、わが国が独自に開発した無線電信機によって、敵艦隊の位置や進行方向をいち早く通報したことにあるといわれます。この大勝が日露戦争の決をきめ、日本は開国40年近くにして、世界五大列強となりました。

しかし、その40数年後の太平洋戦争では、敵の優秀なレーダーによって敗れたといっても過言ではありません。

初期のレーダーに使われていたのは、東北大学の八木秀次教授と宇田新太郎教授が発明した八木・宇田アンテナでした。このことは日本軍がシンガポールを占領したときに分捕った、敵の秘密文書(ニューマン文書)によって判明したのでした。

日本の国土は空襲によって焼土と化しましたが、戦後、国民は立ち上がり産業は復興しました。電気関係では、多量廉価生産に成功し、RF分野では外国技術を真摯に吸収しました。

こうして奇跡の復興を遂げ“Japan as No.1”とも称される経済大国となりました。しかし、残念ながら花一朝の夢、現在は厳しい状況下にあることは皆様ご存じの通りです。

さて、現代科学の最先端を行くRF工学とは離れて、中国古典の代表的な「論語」の開巻冒頭の章句は、

学^{コレ}びて 時^{マタ}に之^{ヨロコ}を習^ヒう、亦 説^{トモ}ばしからずや。

朋^{トモ} 遠^{トモ}方より来^キたる有^リり、亦 楽^{トモ}しからずや。
であります。

本誌読者の皆様は、私と同じく無線を専門とするか、あるいは深い興味を有する方でありましょう。無線の深遠な学理を勉強したり研究することは非常に困難と苦しみがありますが、それを解決したときの喜びが非常に大きいことは皆様同感のことと思います。

明治23年に発布された教育勅語には「朋友相信^{トモ}ジ」とあります。朋友とは中国の古典「礼記」に、

同^{トモ}師曰^{トモ}朋……師を同じくするを朋^{トモ}と曰^{トモ}い

同^{トモ}志曰^{トモ}友……志を同じくするを友^{トモ}と曰^{トモ}う

とあります。このように同門の者が「朋」であり、同志の者が「友」なのです。

われら無線関係の者は、古くはクーロン以来、オー

ム、アンペア、ファラデー、英国の生んだ稀世の科学者マクスウェル、ドイツ科学者のヘルツなどの先覚者の学説を師と仰いで学び、イタリアの青年実業家マルコーニ以下の技術を尊敬し、志を同じくする者であります。かくて我々は「朋」であるか「友」であり、あるいはそれらを兼ねた「朋友」でもあります。

八木先生は「無線学は非常に魅惑的のもの(fascinating subject)であって、一度この研究をしたものは一生抜け出せない」と著書に書いておられます。皆様も、そして私も然りです。

RFは“Radio Friend”とも読まれます。この雑誌を手^{トモ}にされる皆様は、私には初対面のお方とは思われないのです。それは何年も何十年もの昔から、無線を通じて知り合っていた老朋友と、私には思われてなりません。

私が創立したアンテナ技研^{トモ}株の玄関には、マクスウェル、ヘルツ、マルコーニの肖像^{トモ}写真が掲げられています。応接室に入れば長い鬚^{トモ}の八木先生の温顔、資料室にはニューマン文書(複製)が展示されています。

「道に剣客に逢^{トモ}わば 即^{トモ}ち剣を談^{トモ}ずべし」の禪語があります。

朋友よ、共にRFを談^{トモ}じては、心の琴線にふれあい、共振の楽しみを共にしようではありませんか。



〈略歴〉

大正15年3月宮城県生まれ。昭和22年9月東北大学 工学部 通信工学科卒業。昭和31年6月東北大学 工学部 通信工学科 助教授。昭和36年3月八木アンテナ^{トモ}研究所長。昭和39年4月上智大学理工学部教授。現在、アンテナ技研^{トモ}取締役。上智大学名誉教授。アンテナ、伝送機器などの研究・開発に従事。IEEE ライフ・フェロー。